

異文化ワークショップにおける ビジュアル・リフレクションの意義と方法論の考察 ～記録された写真による経験の再構成～

ペク・ソンス

1. はじめに

この研究は異文化間ワークショップにおけるリフレクションの方法として写真を利用した「ビジュアル・リフレクション」を提案し、その有効性を考察するものである。この方法論の背景には二つの現実がある。異文化交流を前提とするワークショップの増加と写真をはじめとするビジュアル・イメージの日常化である。

近年、教育現場における異文化交流のワークショップは増えてきている。このようなワークショップは異文化体験を共有することで、知的・認知的成果を得られるようにデザインされている。この一連の過程においてリフレクションとは自分が取り組んだことを注意深く振り返り、意味づけることにより経験として再構築し、次の認識や行為につなげることである。

デジタル・テクノロジーの発展はメディアを統合し、それぞれの機能は多岐につながるようになった。これら機能集約的メディア機器は我々の日常生活やコミュニケーションの状況を変えた。カメラは高性能化し、プロフェッショナルでない人でも簡単に使いやすくなった。カメラと携帯電話は統合され、写真を取る行為はもはやイベント的な意味より、日常生活を記録する手段になった。さらにその私的な記録が社会的に共有される現在において、これらのビジュアル・イメージの意味合いはより吟味される必要がある。

異文化間の教育プログラムに対する評価の問題とビジュアル・イメージの有効

性に対する問いは、著者の教育的体験から由来する。著者は異文化理解とメディア・リテラシー教育を趣旨とするプロジェクトのワークショップ型プロジェクトを毎年一回、10年以上続けてきた。その間、いくつかの状況が明らかに変化してきた。例えばそれは使用するメディアのデジタル化と境界の解除であったし、参加者たちが携帯電話のカメラを使ってワークショップへの個人記録を残し、それを SNS で共有するようになったことであった。彼らの写真や動画は今まで役割分担者によって作成されたワークショップの記録より多視覚的で豊かなものであったし、観察者による第三者的な記録から当事者の視点の記録になっていた。それに気づいた時点で著者は既存のアンケート調査やインタビュー調査を越え、参加者によるビジュアル・イメージをリフレクションに使用する方法を探った。この論文はビジュアル・イメージ、特に写真を用いる「ビジュアル・リフレクション」という新しい方法論を吟味し、その有効性を問うものである。

2. ビジュアル・イメージによる先行研究とリフレクション方法

2-1. 写真を巡るいくつかの論議

写真に関する研究は主に写真論という学問的伝統の中で行なわれてきた。ここでは写真の本質と社会的意味が問われ、歴史が語られ、美的意味が追求された。古代ギリシアの哲学者アリストテレスの自然観察からその由来を辿る写真は、現在、画素数でその本質が説明されるまでに至っている。ソントグ (1977) は、写真は捕まえた経験であり、世界についてのひとつの解釈であるとし、写真と人間の関係性において写真の本質を見出そうとした。バルト (1985) は写真の本質を構成するものとしては「それはかつてあった」ことを示すことであり、そこに写っているものの存在を批准する点にあるとした。

そんななか、ビジュアル社会科学ではビジュアル・イメージに対する視点や活用の面において、今までとは違う態度をもった独自の分野を再構築している。人

間の意図や行為についてのイメージや、他の種類の目に見える証拠を用いて論ずる（グラディ 2012 p.27）ビジュアル社会科学では、ビジュアル・イメージを社会的な意味で解釈可能なデータとして扱うが、それに対する態度は大きく二つに分けられる。

第一にはビジュアル・イメージが研究や調査の対象になることである。すなわち既存のビジュアル・イメージを解釈する、または解釈させ、そこに内在する意味を引出し、自らの研究に加えることでより豊かな理論体系を作り上げることになる。グラディ（2012）はゴッフマンがジェンダー広告の研究において広告が行為を理想化し、それらが我々の手本や原型として機能することを明らかにしたとして、ゴッフマンこそがビジュアル・イメージのうちに何を発見するかの手本になった優れた社会学者であると主張した。また D. バーンと A. ドイル（2012）はイギリスのダラム州に残っていた炭鉱の閉鎖の際に、変わっていく風景のなかで、石炭資本主義に基づく工業経済と文化から他の何かへ移ることの意味深い変動を人々がどのように感じたかを明らかにするために研究を行なった。彼らは実験グループの人々に炭鉱の写真について語らせ、ビジュアル・ナラティブを引き出した。そのデータは各グループの世代や経験の差により変化に対する解釈が異なることを明らかにした。この研究において研究者によって選ばれた写真は被調査者によってみられ、語られる対象になるが、同時にこれらの写真は被調査者を語らせ、ナラティブ・データをを得る手段として使われるものでもある。

第二はビジュアル・イメージが調査の手段になり、イメージの制作が大事になってくるものである。ここでのビジュアル・イメージは研究者の理論的根拠になるようにあらかじめ慎重に作成、準備されたものである。ベッカー（2012）は社会学の初期において写真は社会を改良するための学問のプロジェクトの不可欠な一部分として、具体的で客観的な証拠として使われたし、人類学やエスノグラフィでは主に観察された社会に関する人類学的な説明の真正性を保証する役割を果たしてきたことを指摘した。インタビューの文脈で写真を利用すること

もしばしば行なわれる。ハーパー (2000) が提案した写真誘発インタビューでは人々を撮った写真が、インタビューイからナラティブや回答を引き出すきっかけとして用いられている。

このような写真の利用は研究者にプロフェッショナル並の写真術を要求し、あるいは実際多数の研究がプロフェッショナルな作り手との共同作業として行なわれた。カメラで意味を生み出すためには、的確なものに向けられ、的確な時にシャッターを押さなければならないと言われ、ビジュアル社会科学に関する最大の障壁は、データとしてイメージを扱うこと、イメージを創造、蓄積、展示する技術に不慣れなことである (グラディ p.47) とも言われている。

専門家によって作られたイメージを研究対象や手段にすることはデータの客観性や信頼性を保つために有効であり、その必要性を否定するわけではない。しかしながらデジタル技術の発達により専門家とアマチュアの差が狭まっている。写真はもはや小さな穴を自分がとらえたいと思う対象を眺め、区切り、枠に入れ、遠近法に従わせるもの (バルト p.17) であるより、空間を面で切り取る作業であり、一般人たちも経済的な心配なしに大量生産し、自由に取捨選択するものになってきた。

バルトは調査者と被調査者の関係を四つのタイプに区別した。第一は実演者としての調査者が見物人としての被調査者に写真を見せて、それに関して質問するものであり、第二は操作者が被調査者をモデルにするものである。第三は見物人としての調査者が実演者としての被調査者に、ある主題や時期に関する写真を見せてくれるよう頼むものであり、第四は操作者としての被調査者が写真を撮っている間に、見物人としての調査者がある様子を観察し、被写体の選択について分析するものである (フリック p.293)。この区分からすると、この研究は第三タイプに属するもので、ワークショップ参加者によって撮影された写真は、彼らの記憶を引き出すための手段になる一方で、解釈されるべき彼らの経験が含蓄されている語りの対象でもある。そしてより広く、この研究における著者の写真に対する

立場は、写真は撮影者によって切り取られた特定の空間と時間の瞬間でありながら、それを見る主体によって再解釈・再構築されるリアリティであるというものである。つまり写真の实在論的な価値を認めながらも、より注目すべきことは写真を見る人の主観性であるというものである。

2-2. ビジュアル・リフレクションのための方法

この研究は基本的に個人事例の調査、すなわち個人に対する「ビジュアル・リフレクション」の方法論を考察するものになる。しかしながらこの調査方法はグループごとの比較検討をも前提にしており、いずれは個人によるワークショップ経験値の差だけではなく、グループによる集団的经验を理解し、より構造的にワークショップを評価する方法論となる可能性がある。さらに進んで、この調査方法は個別のワークショップを評価することにとどまらず、異文化比較の貴重なデータを提供するものにもなりえる。それに基づく比較文化的な研究も想定できるが、それに関しては次の機会で検討することとし、ここではまず基本的に、参加者個人に対するビジュアル・リフレクション事例研究に焦点をしばることとする。

今回の調査の対象は「d‘CATCH 国際共同映像制作プロジェクト」(ペク 2008)の 2015 年に中国で開催されたワークショップである。このプロジェクトは大学における異文化理解とメディア・リテラシー教育のためにデザインされたもので、2003 年から 2015 年まで毎年行なわれており、この年の参加国は日本、タイ、中国、インドネシアであった。具体的なインタビュー対象は日本人参加者 3 名である。

調査は三つの段階からなっている。第一段階はデザインされたワークショップの構成内容である。この内容は実施される前にデザインされたことから先行的であり、また最後の評価によってデザインが修正される可能性があることから結果的なものである。しかしながら、今回の研究でその内容についてはリフレクションされる対象としてのみ言及される。

第二段階は「ビジュアル・リフレクション」の過程であり、写真を使ったインタビューによってナレティブ・データを得ることである。ここで写真はまず出来事の記憶を引き出す補助として使われるが、その記憶を語ることは自分の経験が構成される過程でもある。そして表現された経験は写真と重なりながら、はっきりした意識として認識されるのである。インタビューはエピソード・インタビュー方法で行なわれるが、写真を利用する点において既存のエピソード・インタビューとはすこし異なる。エピソード・インタビューの前提になるのは、特定の領域に関する主観的経験はナラティブ・エピソード的知、ならびに意味論的な知の形で貯えられかつ想起されるということであり、エピソード的知は経験に近く、また具体的な状況や事情に結びついて組織化されるのに対し、認識論的な知はそれから抽象化され一般化された過程や関係性を巡って形成されるものであり、具体的には的を絞った質問によってえられるものである（フリック 2015、p 227）。

ここでは三名の参加者に対する調査事例を検討する。

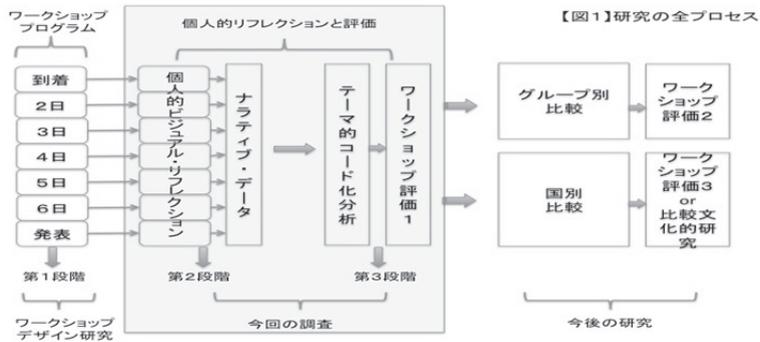
- (1) インタビューイーに写真を選んでもらう。写真はワークショップ当時、自分で撮ったものである。選択する基準はワークショップ中で最も大事な場面だと思われる写真であり、枚数はワークショップの日程に沿って、一日で1枚ないし2枚であった。今回のワークショップでは教員である筆者から事前に写真を撮るように事前に指示しなかったにも関わらず、参加者全員が個人的に写真や動画を撮っていたので、写真を選ぶことに全く問題はなかった。しかし今後、事前に写真を撮ることを参加者に指示しておくこともできるし、写真の枚数も調査者の意図によって変更できる。
- (2) インタビューは1対1（筆者と大学生）で行ない、内容はすべて録音し、後に書き起こされた文書をナレティブ・データとして使った。インタビューイーを選ぶ基準は調査の意図によって異なるが、今回はワークショップ初参加の三

年生を別のチームから一人ずつ選んだ。

- (3) インタビューーには自分が選んだ写真について、①どんなことがあったのか(状況)、②どのように対処したのか(対処)、③それに対する感想はなにか(反応)について説明を求めた。これら個々人の主観的な視点からの説明を集め、組み立てることによって、ワークショップ全体の状況を把握しようとしたのである。
- (4) インタビューアである筆者は基本的には聞き手だが、円滑な説明とその意味を引き出すために必要な時は追加の質問をはさんだ。

第三段階は獲得されたナレティブ・データを分析することであり、ここでの結果がワークショップに対する評価になる。クリッフ(2011)はグループ間の比較研究のためにテーマ的コード化方法を開発した。彼の研究対象になるのは、ある現象やプロセスに対する多様な見方が社会の中でどのように広がっているかということであり、分析の前提条件は異なる世界や社会集団には異なった見方が存在するというものであった。

著者はクリッフが前提にしたグループ間の比較だけではなく、異文化間の比較までも想定しながら、個人的な経験をより詳細に理解するために、彼の方法論を修正しながら適応した。ナレティブ・データは活動日程ごとに三つの要素、すなわち状況と対処と感情的反応に分けて分析された。なぜならこの調査は社会全般ではなく、特定のワークショップを対象にするもので、その目的はワークショップ参加者個人の経験を理解することであり、それによりそのワークショップの内容を改善していくことにあるからである。そのため、分析における最終的なまとめを以下の二点に集中させた。すなわち第一にどのようなことが最も強く経験され、どのように記憶されているのかであり、第二はワークショップの修正箇所に対する意見であった。



3. ビジュアル・リフレクションと評価

今回ビジュアル・リフレクションの対象になったワークショップのテーマは「Equal?」で、四カ国の大学生76名が中国南京に集まった。各国チームは5つのグループで分かれていたが、各国の同じグループで5つの国際チームが作られた¹。ワークショップはこの5つの国際チームごとに各国が制作した映像をつないでオムニバス映像を作る作業を行なった²。

(1) 一日目：ウェルカム食事会とアイスブレイキング

最初の顔合わせになるウェルカム・パーティではみんな会話が續かない、居心地悪さを訴えた。国ごとに母国語で話をする、またはその会話すらないほど沈黙の時間があつた。N.HとY.Aは積極的に他の国の学生に話しかけることで雰囲気をよくしようとしたが、うまくいかなかった。K.Tのチームはランタン作業を一緒にすることがきっかけで食事時の沈黙からみんなが笑顔を見せるようになり、アイスブレイキングに一定の効果があつたことが確認できた。

(2) 二日目：ショーイングとディスカッション

二日目は各チームが作ってきた映像を見せ合い、お互いの映像内容とトピック

クを理解するための時間であった。K.Tのスペースチームは問題なくこの日程をこなした。N.Hのアビリティチームでは日本の映像の趣旨が他の三カ国に伝わらず、日本チームはホテルに戻って繰り返し説明の練習を行なった。Y.Aのジェンダーチームではインドネシア映像の身体における男女平等の可能性と女性の社会的地位という概念についてタイと意見が対立し、激しい討論となった。日本はタイの意見に賛成しながらも仲介役を務めた。

学生たちは自分の国では問題なかった映像が他国の人に理解されなかったり、問題視されたりすることに戸惑いを感じ、激しい議論となった。日本チームは自分たちの映像が理解されなかった原因を英語力と論理的説明力の不足であるとしたが、インドネシアの映像に関しては宗教的・文化的違いであることとした。

(3) 三日目：ディスカッションとプランニング

ワークショップのテーマについてディスカッションし、四カ国の映像をつなぐ映像制作の企画を立て、役割を決める日であった。スペースチームでは日本とタイが企画案で対立した。日本チームがイメージ中心の映像制作を好んだのに対し、タイはわかりやすい説明映像を主張した。意見は対立し、険悪な雰囲気までいったが、中国が仲介役を努め、結局日本の案が通った。納得できずにいるタイチームとの関係を心配したが、ロケ地の下見と夕食で雰囲気がよくなった。アビリティチームでは先日と同様に日本チームが映像説明に苦労し、タイチームが仲介役を務めた。またつなぎ映像の企画ではストーリー性中心の日本と映像テク中心の中国が対立したが、タイの仲介で日本案が通った。ジェンダーチームでは日本チームと中国チームが対立した。日本はディスカッションにもっと時間をかけるべきとし、早くプランニングに進みたい中国と対立したが、他の二カ国が日本に賛同した。プランニングでは説明重視のタイとドラマ性重視のインドネシアが対立したが、みんなで妥協案をまとめた。

国の特性と関係なく、チームことに対立する国と仲介をする国があった。み

んなはまず自分たちの意見をはっきり出し合い確認してから、結論を導き出した。その間に意見の対立や葛藤が生じることがあったが、仲介役や妥協案で解決策を見つける過程に時間をかけた。

(4) 四日目：撮影

全般的に撮影に関しては中国チームの活躍が目立った。インタビューした三人とも中国人学生の撮影に対する思いに強い印象を受けた。そのため、アビリティチームとジェンダーチームでは他の国の人が役者を務める以外に撮影に関わることができず、多くの学生には作業することのない一日となった。それに対し、スペースチームで撮影を担当した K.T はタイと中国との共同撮影過程で多くの撮影テクニックを学ぶことができた。撮影に関心の高い学生の間で、お互いの技術や感覚を学び合えるいい機会であった。

この不平等感を解決する方法のひとつはプランニングの段階でみんなの学生が参加できる内容の企画を立てるように指導するあるいは撮影に参加しない学生向けの全く別のプログラムを準備することである。いずれにしてもワークショップ・プログラムとして解決すべき課題である。

(5) 五日目：編集とプレゼンテーション準備

編集は編集担当者を決め、彼らが全面的に作業を行っていた。今回の調査では編集担当者がいなかったため、編集時の協力や葛藤の様子を詳細に把握することはできなかった。今後、編集担当者に対するビジュアル・リフレクションは必要なことで、多くのことを示唆してくれるはずである。

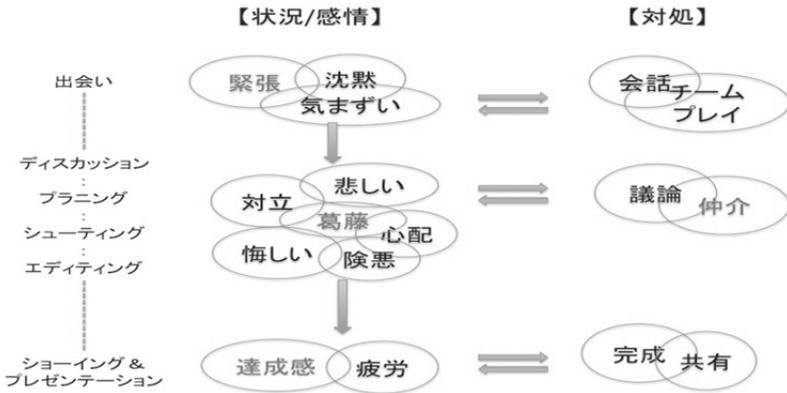
プレゼンテーションの準備は編集を担当する人以外は基本的にみんな参加することになっているが、実際は一部の人だけが作業している様子がわかった。その理由は最後の日にあるフェアウェル・パーティのパフォーマンスのためにグループダンスなどにもっと人数と時間を使うためであった。プレゼンテーションを準備する時間が自分たちの作業を振り返り、成果をまとめる時間であるが、それに対する認識が薄くなっていることがうかがえた。チームパフォーマンスに

異文化ワークショップにおけるビジュアル・リフレクションの意義と方法論の考察
 ～記録された写真による経験の再構成～

対しては無用であるとする意見もあり、今後ワークショップの内容を決める時考慮すべき事項である。

(6) 六日目：ショーイングとプレゼンテーション

プレゼンテーションの手段や形式はチームごとに異なり、パワーポイントやポスターが使われた。この日は午前 10 時から午後 5 時までの長い日程になっているため、遅くなるほどみんなの集中力が弱り、疲労度が増しているため、チームによって会場とのやりとりに差が見られた。ショーイングとプレゼンテーションはワークショップの成果を確かめあう時間だが、今回は参加者内部の行事であった。最後までみんなの緊張感と意識を保つためには、もっと外部からの視線が必要であり、今後は外部に開かれたプログラムが必要である。



4. おわりに：「ビジュアル・リフレクション」の有効性と可能性

筆者は本論で、増加する異文化間ワークショップに対する評価と参加者への効果を計るため、写真を用いた「ビジュアル・リフレクション」という方法を提案した。今回の調査は日本人三名のワークショップにおける経験を分析したもので

あったが、それによって 2015 年に行なわれた d'CATCH ワークショップについて以下の 6 点が明らかになった。

- (1) 参加者は最初の出会いに緊張し、会話を試みるが、その積極性は個人によって異なる。それに対しアイスブレイキングは全体として緊張の緩和に一定の効果があった。
- (2) ディスカッションからプレゼンテーション準備までの過程において対立と葛藤があり、険悪な雰囲気にならぬが、話し合いを続けることで妥協点を見つけ出した。その際、最も大事なものは仲介役の存在であるが、それはホスト国の学生によるものではなく、状況に応じてどこかの国の学生が行なうものであった。
- (3) 参加者の間で学び合いが発生していた。撮影やプレゼンテーションの方法など具体的な技術に関して相手の手法を受け入れ、自分のものにすることは顕著にみられたが、トピックに関する思考の変化は見られず、相手との相違を確認するに止まった。
- (4) 参加者の達成感、異文化交流そのものではなく、共同作業をうまく進めた作業成果から得られていた。
- (5) 国際チームとしてのひとつのチーム意識は最初の出会ってから徐々に出来上がっていき、最後の日ショーイングとプレゼンテーションで他の国際チームと比較することでやっと確認できるものであった。すなわち国際チームのアイデンティティは作品の完成と共に作られたのであった。
- (6) ワークショップ全体において撮影作業の仕組みに問題があった。それらを修正する必要性が確認できた。

以上のようなことが今回の調査で得られた結果であったが、三人の主観的経験はワークショップ全体の状況を理解するのに役立つものであった。その際ビジュアル・イメージとして使われた写真は残された記録であるだけでなく、参加者の記憶を呼び起こし経験として認識させるものであり、その経験を共有させる媒

異文化ワークショップにおけるビジュアル・リフレクションの意義と方法論の考察
～記録された写真による経験の再構成～

介物として機能した。写真は異文化ワークショップ状況を現す証拠になり、それを根拠に参加者の経験を語らせるのが「ビジュアル・リフレクション」である。

現代的なメディア状況において人々が日常的に撮る写真は、主観的意識の延長として多くのことを我々に示唆している。その写真から何を読みとるかは、写真を見つめる人の意図と目的による。その意味において自ら選んだ写真を語らせることはある状況に対する個人の経験を理解するだけでなく、集団的・文化的経験の相違を探る方法論としての可能性も持っているのである。

図1		インタビュー事例 1	インタビュー事例 2	インタビュー事例 3
対象		K.T 男 3年(スペース・T)	N.H 女 3年(アビリティ・T)	Y.A 女 3年(ジェンダー・T)
日時		2015/3/5 11時-12時(31:07)	2015/3/15 12時-13時(45:52)	2015/3/15 11-12時(31:57)
1日目 (1/31)	写真			
ウェルカムパーティー		【ランタンの共同作業】 食事で会話がな。沈黙。気ま ずい雰囲気。同じ国の人もあま りしゃべらない。ランタン作業で 打ち解け始める。笑顔	【遅く到着した M】 同じテーブルの中国人の子たちは あまり話さない。別のテーブルの タイの子たちは積極的会話。M が遅れて到着。	【Mを連れてきた S】 途切れる会話。中国人留学 生チームメイトが S を連れて 到着。中国人留学生存在の 安心感。頼れる感じ。
ティ	話題	①初対面の緊張 (共同作業で打ち解ける)	①初対面の緊張 (積極的な会話を試みる)	①初対面の緊張 (積極的な会話を試みる)
2日目 (2/1)	写真			
各 チー ムの 作品		【レストランで夕食】 みんなで食事。喫煙者と非喫煙 者のテーブルが分かれる。喫煙 者同士で仲良くなる。	【日本映像の説明】 日本の映像だけ理解してもらい ない。タイとインドネシアは身体 障害者でもある種の高い能力が あるという内容。日本は生まれ つき与えられた条件ではなく	【インドネシアの説明】 平等や女性の社会的地位の 意味についての意見対立。宗 教的文化的差を感じる。男女 の身体的平等はないと思う。

異文化ワークショップにおけるビジュアル・リフレクションの意義と方法論の考察
～記録された写真による経験の再構成～

<p>ショー イング &ディ スカッ ション</p>		<p>自分が努力して得たものが能力 だという内容。説明がうまくでき ず苦労。同じ身体障害者を扱っ た映像だが、視点が違うのに同 じように扱われる。苦しい感じ。</p>	
<p>話 題</p>	<p>①喫煙者対非喫煙者（喫煙者 はいろいろな機会と一緒にタバ コを吸いに行き、いろいろ話をす るから、もっと仲良くなるのは仕 方がない）</p>	<p>①日本と3各国の葛藤（日本は 言葉だけではなく、ポストイットを 使って何回も説明を試みた。夜、 日本チームで説明の練習をし た）</p>	<p>【中国プランニングの説明】ディ スカッションに消極的な中国。 プランニングの話を持ち出す。 日本は深いディスカッションの 必要性を訴え。</p> <p>①タイとインドネシアの対立 （日本は妥協点を仲介）②日 本と中国の対立（タイとインド ネシアが日本に賛同して、 ディスカッションを続ける）</p>
<p>3日目 (2/2)</p> <p>ディス カッ ション &ブラ ニング</p>	 <p>【ディスカッション直後】 日本とタイが企画案で意見が対 立。険しい雰囲気。日本の意見 を強く通す。タイは機嫌悪くな る。中国の仲介。自分は内気な</p>	 <p>【日本案を説明するタイ】 タイが日本映像を代わりに説 明。原因は英語力と自分の問題 意識を消化しきれてなかったこ と。みんなに面倒さがられる感じ。</p>	 <p>【討論をみる中国チーム】 男女平等について3各国の熱 心なディスカッション。みんな のディスカッションを見るだけ の中国。</p>

	<p>性格。英語のニューアンスがうまく伝わらないもどかしさ。嫌な時間。頑張る。意外と伝わる。達成感。自信。</p>	<p>悔しい。</p>	
			
	<p>【ローケ地の下見】 タイとの雰囲気心配。市内のローケ地を見に行き夕食する。雰囲気が回復。</p>	<p>【日本案が採択された後】 プ ランニングでストーリー性重視の日本と映像テク重視の中国が対立。中国との陰湿な雰囲気。日本案を代わりに説明するタイ。日本案が通る。</p>	<p>【プランニングで意見対立】 つなぎ映像の企画でタイの論理性重視とインドネシアのドラマ性重視が対立。</p>
話 題	<p>①日本とタイの葛藤(中国が仲介した。英語で意見を伝えるのに、頑張った。一緒に食事したり、共同目的を持って働いた。)</p>	<p>①日本と3各国の対立(タイが仲介をし、日本の代わりに説明した) ②日本と中国の対立(タイが仲介し、日本の代わりに説明した。)</p>	<p>①日本と中国対立(ディスカッションの重要性について中国を説得した) ②タイとインドネシアの対立(妥協案としてドラマ仕立ての映像にして、ナレーションでしっかり説明を入れることにした。)</p>
4 日目 (2/3)			

異文化ワークショップにおけるビジュアル・リフレクションの意義と方法論の考察
～記録された写真による経験の再構成～

撮影 真	【大学が撮影現場】 タ イの撮影方法が好きで教えてもらう。いい勉強になる。日本チームの撮影プランニングの詰めの甘さ。みんなに迷惑。反省。責任。みんなの苛立ち。	【暇な非撮影チーム】 撮影に関わらない人は時間を持って余す。他のチームと交流。撮影に関わらない人のための計画の必要性。	【暇な非撮影チーム】 非 撮影チームには時間の無駄。今まで消極的だった中国チームが撮影で力を発揮。他の人の出る幕がない。共同作業の姿勢が必要。
	話 題 ①日本撮影チームの失敗(中国人リーダーに謝った。反省し、次回をもっと精密な撮影プランを準備すべきだ。)	①撮影チーム対非撮影チーム (非撮影チームは時間つぶしをした。撮影に関わらない人のためのプログラムが必要だ)	①撮影チーム対非撮影チーム (もっと多くの人が撮影に関われる体制と心構えが必要だ)
5日目 (2/4)			
編 集 & プ レゼ	【編集長の日本のD】 編集長になった日本のD。各国1名の編集担当。葛藤なし。	【ホテルで編集修了】 積極的に仕事してくれた人たち。1台だけのPC。タイ中心で編集。	【ホテル部屋での作業】 インドネシアチームは別のホテルのため、不参加。みんなの積極性。最も高い達成感
ンテー ション 準備			の時間。最も想像してた d' CATCH のイメージ通りの時間。
	【編集終わり、みんな大喜び】編集が夜 12 時過ぎにホテルの部屋でやっと編集が終わった。編		

		集は編集チームにすべて任せ、順調に終わった。		
	話題	①編集チームによる編集作業 (編集は編集担当者に任せる)	①編集チームによる編集作業 (編集は編集担当者に任せる)	①英語プレゼンへの緊張(みんなが励まし、一緒に準備)
6日目 (2/5)	写真			
ショー イング & フェ アウェ ルパー ティ		【プレゼンテーション】 撮影もつらかったし、ディスカッションもめめたして最後の達成感はずい。日本の担当者 Y と中国人のチームリーダーがよくまとめてくれて満足な結果。	【発表後に記念撮影】 最後の発表で、会場も疲れ、集中力もなく、質問も出ない。自分たちは満足。	【プレゼンテーション】 多い質問と会場とのやり取り。ポスターよりパワーポイントを選択するべき。
	話題	①発表に対する自信	①発表の満足と疲労感	①発表の達成感と反省

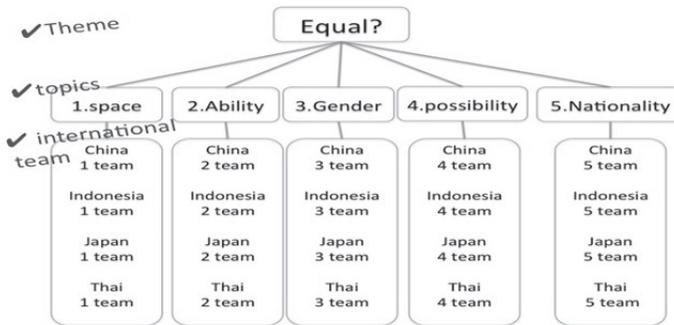
参考文献

- ウヴェ・フリック (2015). 小田博志監訳 質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論. 春秋社
- ペク・ソンス (2012) 『メディア・リテラシーと異文化理解のための国際教育プログラム実践研究』日本教育メディア研究第 18 巻 (p.37-p.47)
- デヴィッド・バーン、アイダン・ドイル (2012) 視覚的なものと言語的なもの—文化変動の探求に関するイメージと議論の相互作用 キャロライン・ノウル

異文化ワークショップにおけるビジュアル・リフレクションの意義と方法論の考察
 ～記録された写真による経験の再構成～

- ズら（偏）（2012）ビジュアル調査法と社会的想像力—社会風景をありありと描写する—ミネルヴァ書房
- ジョン・グラディ（2012）目に見える証拠と取り組む—招待といくつかの実践的なアドバイス キャロライン・ノウルズら（偏）（2012）ビジュアル調査法と社会的想像力—社会風景をありありと描写する—ミネルヴァ書房
- ハワード・S・ベッカー（2012）証拠としての写真術、説明としての写真 キャロライン・ノウルズら（偏）（2012）ビジュアル調査法と社会的想像力—社会風景をありありと描写する—ミネルヴァ書房
- ロラン・バルト（2010）花輪光訳 明るい部屋—写真についての覚書— みすず書房
- ハーパー（2000）

1



2

[International Team A / 25min. Video]

Japan Team 1 Video5min.	Indonesia Team 1 Video5min.	Thailand Team 1 Video5min.	Chinese Team 1 Video5min.
----------------------------	--------------------------------	-------------------------------	------------------------------

5min. Connecting video making at the workshop by each international team.
 = total 25min. Ombus video

